



アメリカ系ユダヤ人、一貫してユダヤ人独立の批判的立場をとり、著書『ユダヤ人の歴史』(1986)、『ユダヤ人の未来』(1986)などがある。

シオニストによる反セム主義との協調

反セム主義についてのシオニズムの考え方の本質的部分はすでにホロコースト以前に定まっていた。反セム主義は不可避であり、これと戦って克服できるようなものではない。唯一の解決方法は、移住を望んでいないユダヤ人を生成ユダヤ国家に移住させることである、というのがシオニズムの基本的考え方であった。シオニズム運動が軍事的にパレスティナを略取しえないということが運動に帝国主義国の後援を頼むことを余儀なくさせたが、その場合シオニズム運動は、帝国主義が一定程度は反セム主義に動機づけられていることも期待していた。さらにシオニストたちは、革命的マルクス主義を同化主義的な敵とみなしていたから、このマルクス主義と闘うためには、東欧の反セム主義的な右翼民族主義運動という分離主義の同類と共闘することをも正当化したのであった。

ヘルツルとその後継者たちの見通しは「正しかった」ことが判明した。シオニズムがパレスティナにゆるぎなき陣地を確保しうる契機を与えたのは、まさに反セム主義者のバルフォアだったからである。イスラエル国家は最終的には対英武装反乱によって確立されたが、委任統治初期の英軍駐留がなければ、パレスティナ住民がシオニストを追い出すのは簡単だったであろう。

しかしまさにここで我々はイギリスの口車のうまさにひっかかっているのである。バルフォアは実際シオニストにパレスティナでの足掛りを与えたのだが、委任統治をになったイギリスがヨーロッパでユダヤ人をその敵から保護したことがあっただろうか。

反セム主義はつねに克服することが可能だったし、そればかりかフランス、ロシア、ウクライナでは世界シオニスト機構の支援がなければ敗北することもありうることを示された。これらの国で国民がシオニストのいうがままにならなければ、反セム主義をうち負かすことはできなかったであろう。

世界シオニスト機構の初期の政策は、ヒトラーの時代になっても組織の中心的指導者であったヴァイツマンによって本質的な点で継続された。世界シオニスト機構の中で、一九三〇年代にナチズムと戦う立場を鮮明にしたいと望んだ人びとが内部の主敵と認識したのは自らの運動の総裁たるヴァイツマンだったのである。ホロコースト以後世界シオニスト機構の総裁に就任したナホーム・ゴルトマンは、この問題をめぐってヴァイツマンと、アメリカ・シオニズム運動の指導的人物ステイヴン・ワイズとの間で交わされた激しいやりとりを後に次のように述べている。

思い出すのは、ワイズとヴァイツマンとの激論である。ヴァイツマンは生まれながらのきわめて偉大なシオニスト指導者だったが、他の事柄に関心をもちことをすべて拒否した。ナチス政権初期の時代にはドイツ・ユダヤ人を救うことに関心を示したが、ユダヤ人の権利のために闘っていた世界ユダヤ人会議の要求を認めず、シオニストの活動から時間を割くことも考えなかった。ステイヴン・ワイズは「しかしこの要求も同じユダヤ人問題の必要不可欠な構成部分なのだ」とヴァイツマンに反論した。離散ユダヤ人(シオニズムのほうをふり向かないユダヤ人)の問題を見失ったらパレスティナを獲得することはできない。ただユダヤ人の生活の全体を扱ってはじめてこれは理解できることだ。

シオニズムが以上のような状況にあり、指導者たちがこうした人物で占められていたまさにその時、アードルフ・ヒトラーが歴史の舞台にしゃしゃり出てきたのであった。